モンゴル国と日本における児童の色彩感覚比較

妻藤　純子

（岡山理科大学教育学部）

美術教育において、児童のもち得ている色彩感覚を把握することは、効果的な色彩指導につながる。色彩感覚は、人々の生活圏の自然環境の影響を受けながら、時間をかけて育まれたものといえる。そこで、我が国の色彩感覚の特徴を、自然環境の大きく異なるモンゴル国と比較することでより鮮明に理解することができると考え、本研究では、モンゴル国と日本の児童それぞれの色彩感覚に対する実態を明らかにすることを目的として調査を行った。この調査では、両国の児童を対象とし、身近な対象（空、山、海などの身近な自然や季節）からイメージする色彩、色彩からイメージする対象、そして色彩に対する嗜好についてのアンケート（記述式）を実施した。その結果、両国にほとんど差のない回答がある一方で、海や空、太陽や月、季節に関する項目などで顕著な違いが見られ、色彩感覚に差異があることが確認できた。

キーワード：美術教育、色彩感覚、モンゴル国、比較研究

1. はじめに

美術教育において色彩指導は重要な指導事項の一つである。小学校での色彩指導は、日本においては主に「図画工作科」で、モンゴル国（以下モンゴル）では『美術・技術』という教科で実施される。美術教育において色彩は、絵や立体、工作など表現形態は異なっても、すべての表現に係る重要な造形要素である。児童は、色鉛筆やクレヨン、水彩絵の具などの画材を用いて、自分の表したいものに合う色を選び、表現していく。個々に好みの色も決まっており、表したい色に合うという理由だけでなく、自分の好みの色、使いたい色を用いて表現することも多い。児童の身の回りには、様々な色彩が溢れており、選択肢も多様にある。多彩な色を目にしていても、混色によってつくりださなければならない色の場合はその方法を指導しなければならない。また、自分の好みの色に固執し、表現する色が限定的になるなど、幅広く色彩についての知識の獲得を促していく必要もある。色彩指導をする上で、どの程度の色を知っているか、また身近な対象に対してどのような色を感じながら見ているかなど、児童の色彩感覚に対する実態を知ることは、効果的な指導をするための礎となる。

そこで本研究ではモンゴルと日本における児童の色彩感覚を比較し、それぞれの色彩感覚の実態を明らかにすることを目的とする。自然などの身近な対象に対する児童の色彩感覚について日本と諸外国を比較し、日本人の色彩感覚の特徴を確認することで、美術教育における具体的な色彩指導へとつなげることができるとともに、異文化理解へと誘うことも期待できるものと考えている。

研究の方法として両国児童への色彩感覚に関する実態調査を行い、共通点や相違点を探っていくこととする。色彩感覚の差異は、国や地域の地理、自然、文化的な影響によって生まれるとされる。モンゴルはアジア大陸の内陸に位置する国であり、日本のように海に囲まれてはいない。日本は国土の 70%を森林で占め、平野の少ない国である。モンゴルは国土が広く、その 70%以上が草原であり、森林は少ない。大陸性の気候であり冬が長く極寒である。また国境が複数の国と接しているなど、自然環境だけでなく、社会的文化的にも日本との違いが多い国である。色彩感覚に影響するとされる自然環境など、異なる点の多い両国を比較することは、それぞれの特徴を知る上でも意義あることと考える。近年、両国の関係は深く、往来も盛んである。日本への留学生も多い。このように親しい関係でありながら、日本人にとってモンゴルは草原を馬が走るイメージが強く、理解できていないことも多い国である。色彩は人の心理とも関わっていることからも、色彩感覚を知ることは互いの国民性を深く理解することにつながると考える。

本稿の構成については、まず 2 章において両国の色彩の特徴について述べるが、ここでの国の色彩とは伝統的色

彩のことである。伝統的色彩を見ることは、色彩に関する国の根を知ることになる。化学染料のなかった時代から先人は植物などの色を用いて布などを彩ってきた。つまりその国の植生が染料となり、その染料で抽出された色がその国の伝統的かつ特徴的な色彩となる。伝統的色彩は国の自然環境などの影響を受け、人々の色彩に係る潜在的な感覚を示すものであり、個人のもつ色彩感覚の基になっているものと考える。3 章では、両国児童に実施したアンケート調査から得られた色彩感覚についての結果を示し、その傾向を明らかにする。モンゴルと日本の伝統的な文様や色彩に関する研究は進められているが、両国の児童を対象とした色彩感覚に関する比較研究は見られない。本研究を通して両国の感覚的な特徴についての理解が深まり、両国の美術教育を深く考える契機としたい。

2. モンゴルと日本の色彩の特徴

2.1. モンゴルの色彩

モンゴルには色彩に関して、独特な考え方がある。ウランバートル市内小学校で参観した授業にモンゴル伝統色についての内容があった。赤、青、黄、緑、オレンジ、黒、ピンクの「七色」と、「白」についての学習内容である。まず教師は色の定義について理解させることから始め、モンゴルの伝統的な色名について紹介する。モンゴルでは、この「七色」と「白」をそれぞれ「親色」と呼び、七色の中の一色と白を混ぜてできた色を「子ども色」と呼んでいる。例えば、七色の中から青を選び、青に白を混ぜてできた水色が子ども色となる。赤、黄、青の三原色をもとにしながらも混色の表し方は独特である。

また色の調和を考えることは、伝統文様から現代のデザイン装飾まで幅広く活用されている重要な視点となっている。モンゴルの伝統文様について著された『装飾模様』（J アイアン,2020）をもとに色彩について紹介する。モンゴルでは文様やデザイン装飾だけでなく、モンゴル絵画においても鮮やかな色を使う伝統があるという。モンゴル人と自然との関係の中で、色の概念が生まれ、色にはその色のイメージを表すシンボル的な意味合いがある。表 1 は、赤、黄、青、緑、白、黒、ピンクの 7 つの色についてまとめたものである。

表 1　モンゴル七色の概念

色	モンゴル伝統的色の概念
赤	炎、長寿、若さ、繁栄、愛、強さ
黄	黄金の太陽、黄金、富、権力、不滅、愛、幸福、誇り
青	尊敬、信頼、忠実、堅固、安定、平和
緑	大地を表し、世界の繁栄、五徳、平和
白	牛乳、乳製品、月、純粋さ、菩提心、慈悲
黒	堅実さ、堅固、真の強さ
ピンク	優しさ、無邪気さ、信頼感

赤は、命のエネルギーを表すものとされている。黄と青については太陽の黄、天の青であり、天を仰いで祈りをささげるなど宗教的な意味合いも含んでいる。緑は大地の象徴として表される。白は、人の命を支えるミルクの白であるとともに、混じりけのない色として清らかさや純真な心を示す。混色において七色のそれぞれに白を混ぜると述べたように、白は親色「母」の色であり特別な色とされている。白の概念として牛乳を表すなど遊牧民の命を支えるものの象徴としての色であることが想像できる。西（2000）によると白はモンゴル人が最も重んじている色であるとされる。また黒は歴史的にはモンゴルでは比較的に忌む色であるとされた。しかし現在では、黒は表 1 に示すように堅実さや強さを表しており、時代を経て概念は変化していくものであるいえる。ピンクは、優しい感情を表すとともに、無邪気さや楽しさといった、かわいらしさや柔らかさをも表している。このように、モンゴルには色彩に関する伝統的な概念があり、多彩なデザインが生み出されている現在においても、これらの伝統的な考え方を尊重し、伝統と現代との調和を図ることを重視している。

2.2. 日本の色彩

日本は色彩豊かな国の一つといわれている。赤といってもその色数は 200 を超える。日本は四季の変化をはっきりと感じられる国でもある。そのことは、自然や暮らしに季節ごとの変化をもたらし、それに伴う色彩も季節ごとの特徴を表している。平安時代には、季節により着用する衣の色の組み合わせ（色目）を考え、その組み合わせに名前を付けていた。日本固有の色名により、当時の人々が何を通して色を感じ取っていたかよくわかる。では、いつ頃から色が用いられるようになったのであろうか。塚田（1978）は縄文式文化から始まっており、縄文式土器には赤と黒が多く使用され、他にも白が見られるとしている。色名について城（2017）は古代社会にはアカ、クロ、シロ、アヲの 4 原色があり、ほかには植物や鉱物などの染料の名前や、花や葉などの植物そのものの名前を、色を表すものとして代用していたとしている。また城（2017）は繧繝や水墨、赤、青、黄などそれぞれの色の系譜についても解説している。4 原色に黄が加わり、赤、青、黄、白、黒の 5 色となり、さらに繧繝と呼ばれるグラデーションも表され、色彩豊かな文化が築かれていくことになる。また日本美術には白と黒の無彩色の表現もある。水墨画である。墨の濃淡で多彩な自然などを表す。屏風絵や襖絵など金箔上に極彩色で描くものがあるからこそ、侘び寂びの精神性も相まって無彩色の中にも彩を感じる目をもつことができたといわれる。赤は古来より呪術的な色であり、魔除けの色として使用された。現在も健康長寿を願う色として還暦の祝いや神社仏閣などで用いられている。赤は私たちの暮らしの中の特別な色として今も根付いている。黄は黄金をイメージさせる色である。そもそも中国の皇帝色であったが、日本ではやや赤みがかった黄が天皇の色とされ庶民は薄い黄の色を着用していた。琉球においては黄が重視され、王族のみが着用することのできる色となった。また物語や映画の影響によるものであろうが、黄は幸福の象徴とされ、日本人にとって黄は幸せを運ぶ吉兆の色と認識されている。青は日本においては藍色が代表的な青であり、美術的には日本を象徴する色ともなっている。藍から生まれる青は染めの技術により多彩に生み出される。原料であるタデ藍は毒蛇や害虫を寄せ付けない働きがあり、藍は庶民が普段から大いに用いた色でもある。白は神の色であり神聖なものとされる。悪霊から守る色であり、冠婚葬祭で用いられる色でもある。

このように日本人にとって色彩は文化的な意味合いをもち、生活の節目のときにも色を意識しているのである。

3. モンゴルと日本の色彩感覚調査

3.1. 色彩感覚比較調査と方法

両国にはそれぞれ歴史的文化的背景をもとに、独特の色彩概念がある。この概念は、児童の暮らしに関わりをもち、慣習の一つとして行事などを通して意識づけられていく。しかし児童を取り巻く環境は家庭や学校、地域に限定された幅狭いものではなくなり、メディアを通じて多様な価値観に出会う。またインターネットにより他国の価値観をも知ることとなり、その中には共通の価値も生まれやすくなっているといえる。このことは色彩に対する見方や感じ方が多様化するとともに、国による色彩感覚に大きな差異は生じにくくなっているのではないかと推察する。本研究ではモンゴルと日本の児童の色彩感覚を調査し、両国の児童が今どのように色彩を捉えているかその実態を把握した。児童に提示する色彩については、先に述べた両国の概念化された色をもとにアンケート（記述式）による調査を実施した。

アンケートは、（1）身近な自然（山、空など）からイメージする色について、（2）四季からイメージする色について、（3）色からイメージする対象について、（4）嗜好する色についての質問に対して回答を記述するものである。（1）と（2）は画像を提示するのではなく、山、海、春、夏といった言葉からイメージし回答する。（3）の色からイメージする際も同様であり、具体的な色を示してイメージするのではなく、赤、青など色の言葉からのイメージを回答するものである。各質問事項について 2 ずつ回答させるが、直感的に感じたことを重視し、2 つのうち最初に記述した色や対象、つまり最初に浮かんだものを優位とし、それらについて集計する。色には幅があり、例えば、赤といっても微妙に変化しながら暗い赤から明るい赤まである。つまり個々にイメージしている赤は同一の赤とは限らない。本調査では個々がイメージする色の明度や彩度までは明らかにしてはいない。空と海の色については、複数の色カード提示し、その中からイメージする一色を選択する方法で実施した。

調査時期はモンゴルへの渡航時期（2023 年 9 月・2024 年 9 月）に合わせ、モンゴル（ウランバートル市）では 9 月中旬に実施した。日本（鳥取と神戸）では、11 月中旬から下旬に実施した。調査対象として 5 年生以上を設定した。このことは児童の生活年齢が 10 年を超え、ある程度経験を積み重ねたことにより、多様な視点で生活の中

にある様々なものをイメージできること、そしてアンケートに記載された問いの意味を容易に理解できると考えたからである。2023 年の調査では、日本は小学 5 年生 56 名、モンゴルは 6 年生（現地では中学 1 年生）と 7 年生（中学 2 年生）の 43 名の協力が得られた。2024 年は日本、モンゴルともに小学 5 年生での実施協力が得られ、それぞれ 65 名、64 名で実施した（表 2）。本稿では国別の特徴をみるため、性別による差異については言及していない。

本研究における調査は児童を対象としているため、アンケート票は無記名とし、また学級名も記さないとすることで個人が特定されないよう配慮した。

表 2　調査対象地と被験者数

調査対象国	調査実施地	対象者	被験者数	実施時期
モンゴル	ウランバートル市内	5～7 年生	107 名	2023 年 9 月・2024 年 9 月
日本	鳥取県内・神戸市内	小学 5 年生	124 名	2023 年 11 月・2024 年 11 月

3.2. 本調査における色彩に対する基本的捉え方

対象からイメージする色や、色からイメージされるものは人によって異なる。対象に対して他者と同じイメージをもつ場合もあれば、全く異なる色をイメージする場合もある。身の回りにある製品の色は多数の人が抱くであろう色に対するイメージをもとにしている。例えば、涼しく感じる色として、薄青や水色、黄緑などの淡い緑色系の色がある。また反対に暖かみを感じる色として、赤やオレンジなどが挙げられる。それらはそれぞれ寒色系、暖色系として色が種別され、夏には寒色系、冬には暖色系で彩られた製品が多く出回る。しかし、人々が皆、同様に感じるわけではない。色に対する感じ方は、個人の生活環境や体験が大きく関わっている。このことから色彩に関する調査や指導においては、個人差があることを前提としなければならない。本調査においても個人差があることを踏まえ、両国の色彩感覚についての傾向を探るものであることを確認しておきたい。

3.3. 調査結果

（1）身近な自然から色をイメージする（図 1、3、図 5~9）

本調査における身近な自然として提示したものは、山、空、海、湖、太陽、月、夕焼けの 7 項目である。図 1 を見ると山からイメージされる色は、両国とも緑が最も多く、モンゴルでは 62%、日本では 86%である。日本では黄緑が 8%、モンゴルでは茶色が 22%と 2 番目に多い。ウランバートル市は草原の中の都市である。市内中心部は高層ビルが立ち並び、人口はウランバートル市に集中している。ビルの間からは草原の丘や山並みを見ることができる。草原の色は緑から枯れ色に変化していく。現地の話によると 2023 年は例年より気温が高く、朝夕は気温が低いが日中は暑い日もあるとのことであった。9 月時点ではまだ緑に覆われていた（図 2）。

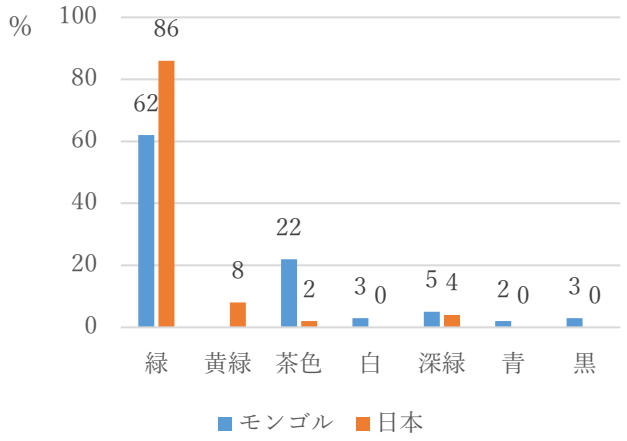


図1　山からイメージされる色

図2 ウランバートル市郊外の山並み（筆者撮影, 2023.9）

図 3 は空についての結果である。いずれも青と水色を多くイメージしており、青はモンゴルでは 58%、日本は 42%である。日本の児童は青よりも水色を多くイメージしている。空の色の見え方は、国の位置する緯度との関係も理由として挙げられている。図 4 は晴天の日のウランバートル国際空港の空である。雲一つない澄み切った青である。日本の児童は空を塗るとき青と白を混ぜた白みの強い青色や水色を使い、青一色で空を塗ることはあまり見られない。日本には水色の他に空色という呼び方もある。

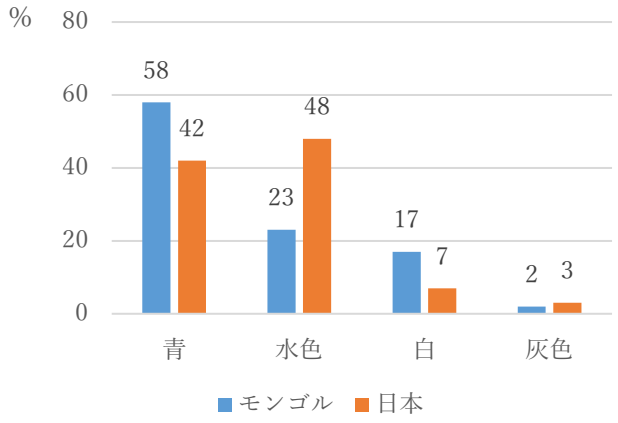


図 3　空からイメージされる色

図 4　ウランバートル空港ビルからみた空
（筆者撮影, 2022. 9　午前 7 時）

図 5 と図 6 はそれぞれ海と湖の結果である。両国とも青系の色をイメージしており、青と水色を合わせるとモンゴルでは 87%、日本は 96%となる。海についてモンゴルでは青、水色とも大きな差がないのに対して、日本では水色ではなく青をイメージする児童が圧倒的に多い。海に面していないモンゴルの児童が、どのようにしてこれらの色を認識しているか興味深いところである。湖でイメージする色に青と水色を選んだ児童は、モンゴルが 68%、日本は 93%である。湖の青と水色のイメージには、海にみられるほど大きな差はない。モンゴルの児童は緑、白、黒などの回答もあり、日本の児童より多彩なイメージをもっているといえる。モンゴルの広大な大地には大きな湖がいくつもあり、その中には塩湖もある。具体的な湖の名前を挙げた児童もいた。

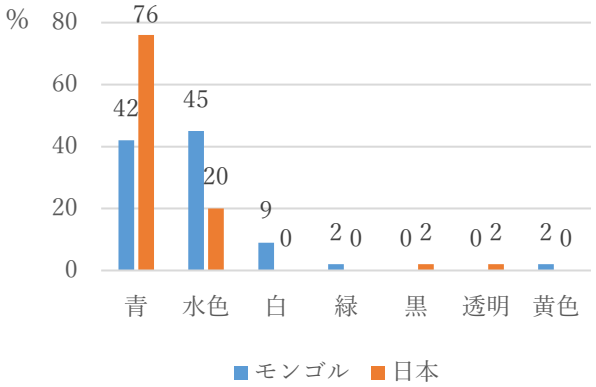


図 5　海からイメージされる色

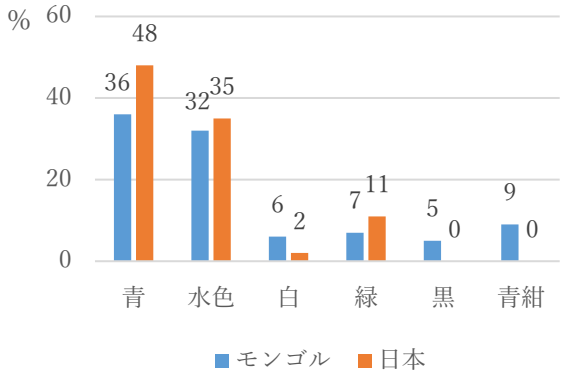


図 6　湖からイメージされる色

図 7 は太陽からイメージした色の結果である。太陽の色に国や地域による違いがあることはよく知られている。日本では太陽の色は赤であり、欧米では黄で表されることが多く、世界的に見たとき赤で表すことは珍しいとされている。齋藤（2009）は、日本人の赤い太陽のルーツについて、日本人と中国人、インドネシア人を対象に調査

（1997）した。それによるとインドネシア人は欧米と同じく黄を、日本人と中国人は赤を選択したとある。また日本人よりも中国人の方が赤を選択する傾向が強かったとし、日本人が赤で表すことは中国文化の影響を受けたのではないかとしている。室（1982）は、児童画においても太陽の色について国や地域による特異性が見られるとし、日本の国旗に示された色が赤であるなど、日本固有の文化による影響であるとしながらも、国別の特異性要因については、絵の指導者の影響など様々に考えられ、明確ではないとしている。また、太陽を描くことの多い幼児期においては、居住する国や地域の気候により太陽が人々の暮らしの中にどのような対象として存在しているかにもよるとし、その例として、しばしば太陽に顔を描く緯度の高い地域では、太陽は光を意味し、暖かく優しい存在として擬人化するとしている。ウランバートル市は標高 1300mに位置し、緯度も高く冬が長い。光を表すという点からも、モンゴルの児童が太陽を黄で表すことの理由ではないかと推察する。

本調査においても、日本は赤が 48%と多い。モンゴルでは黄が 70%を占め、それに対して日本の黄は 6%である。日本ではオレンジをイメージした児童が 42%であった。オレンジは黄より赤みの強い色であり、太陽から赤を感じていることがわかる。赤とオレンジを合わせると 90%になる。

図 8 は月の結果である。日本では、黄が 81%を占める。モンゴルでは黄も 11%あるが、白や灰色が、それぞれ 30%と 41%であり、黒の 5%を合わせると、76%の児童が月から無彩色をイメージしていることになる。

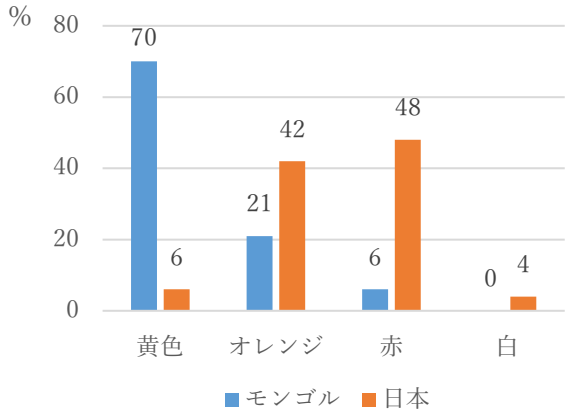


図 7　太陽からイメージされる色

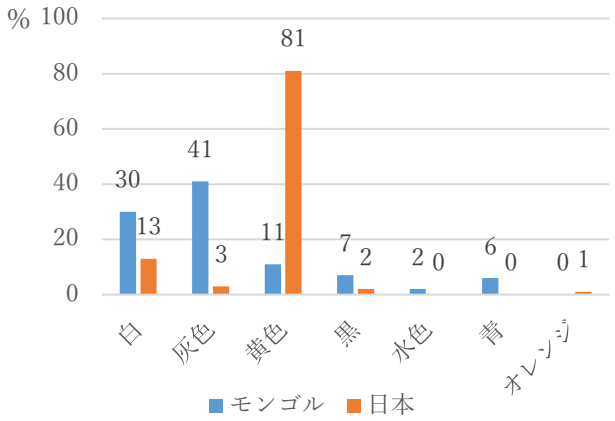


図 8　月からイメージされる色

図 9 は夕焼けからイメージされる色の結果である。両国ともオレンジが多く、モンゴルで 54%、日本が 69%である。次に多い色が赤であり、モンゴル 24%、日本 29%であった。モンゴルでは黄のイメージも多く、13%を占めている。その他にモンゴルではピンク（少し青みがかっており紫に近い色）日本では茶色（黒みがかった橙ともいえる）をイメージする児童もいる。

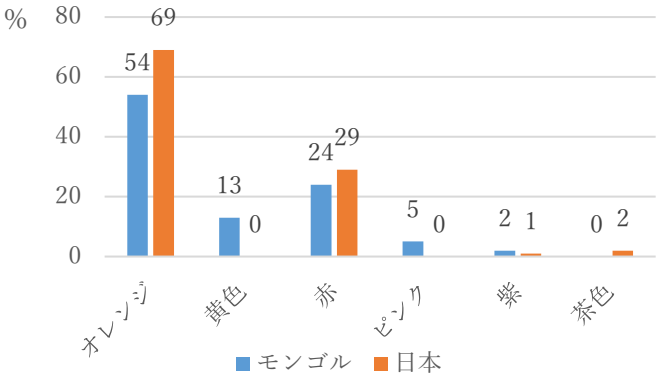


図 9　夕焼けからイメージする色

（2）四季から色をイメージする（図 10～13）

春、夏、秋、冬の 4 つの言葉を提示し、それらからイメージされる色について質問をした。モンゴルと日本の気候や植生は大きく異なる。モンゴルは大陸性気候であり、亜寒帯に属する地域もある。国土は全体的に標高も高いため、一日の寒暖差が激しい。夏は暑く、冬の寒さは厳しく、マイナス 20 度も珍しくはない。四季ははっきりしている。年間降水量は少ないが、近年は突然の豪雨により浸水被害が生じるなど異常気象の影響も懸念されているという。国土のほとんどが草原で、西側には山脈、北側には森林、南側には砂漠が広がっている。このように気候が大きく異なる両国の春、夏、秋、冬からイメージされる色について見ていくこととする。

図 10 は春からイメージされた色であり、両国に顕著な違いがある。春については日本の児童の 84%がピンクと答えている。他の色は 0～数%とかなり低い。モンゴルでは、緑と茶色が 21%、黄色が 18%となっている。白や灰色といった無彩色もイメージされている。日本の春がピンクをイメージする理由は、桜であることは想像に難くない。日本人がイメージする春のピンクは桜の色である。モンゴルの春は日本の春とは異なり、依然として寒さの厳しい季節である。天候が変わりやすく、暖かい日もあれば急に雪が舞うこともある。モンゴルの児童にとっての春は、目まぐるしく変わる景色に多彩な色を連想させる季節と考えられる。

図 11 は夏についてである。モンゴルでは 84%の児童が緑と回答している。緑と答えた日本の児童は 16%で、32%が青と答えている。水色を合わせると 42%となる。日本の児童が青や水色の青系の色と回答した理由として、夏のイメージを海や空を想起していることが考えられる。本調査において調査対象とした児童は日本海に面した町と、瀬戸内海にある貿易港を抱える町に居住している。これらの町の児童にとって、海は身近な環境であり、夏の娯楽の場としても関わり深いものといえる。また、夏になると増える飲用水のコマーシャルなどメディアの影響も推察される。日本の児童は清涼感のある色に加えて、赤、オレンジといった暖色系の色など多彩にイメージしている。モンゴルは春を迎えてもなお寒さが残る。夏になり、草原や山並みの緑を感じることのできる季節となる。

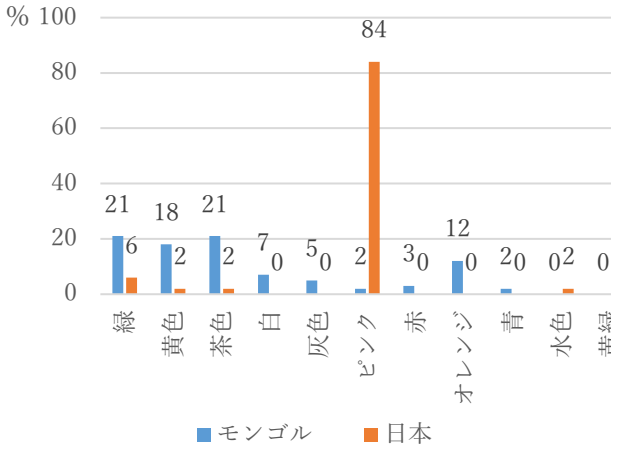


図 10　春からイメージされる色

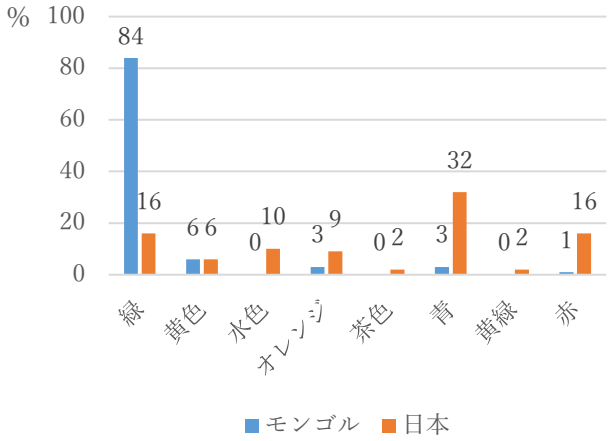


図 11　夏からイメージされる色

図 12 と図 13 は、それぞれ秋と冬の色のイメージの結果である。

図 12 の秋からイメージされる色には大きな違いがある。黄をモンゴルでは 47%、それに対して日本では 6%の回答である。日本で最も多い色が赤であり、40%の児童が回答している。モンゴルで赤と答えた児童は 5 %である。日本のイメージで赤が多いのは、日本の森林に赤く色づく広葉樹の多いことが要因であろう。児童は秋になると近くの山が黄から赤、そして朽ち果てる前の茶に変化する様を目にしながら生活している。日本では茶色の回答が 12%ある。日本の児童の秋の印象は、紅葉した葉の赤を最も強い印象として捉えているといえる。森林と草原といった両国の植生の違いが秋の彩りの印象の相違につながっていると考えられる。両国ともオレンジを多くイメージしており、モンゴルでは 36%、日本は 38%である。日本は黄からオレンジ、赤と回答の数が増加し、モンゴルは逆に黄からオレンジ、そして赤へと数が減少している。

図 13 は冬に対する結果であるが両国とも白の回答がほとんどであり、モンゴルは 85%、日本では 82%である。回答された色を見ると、水色や青の寒色系の色、白を含め黒や灰色の無彩色である。冬に関して、気温の差は大きくとも、イメージされる色から、雪や氷、曇り空など共通の色のイメージをもっているといえる。

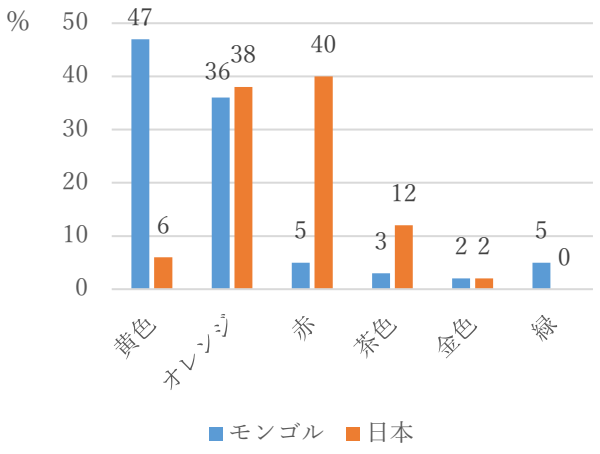


図 12　秋からイメージされる色

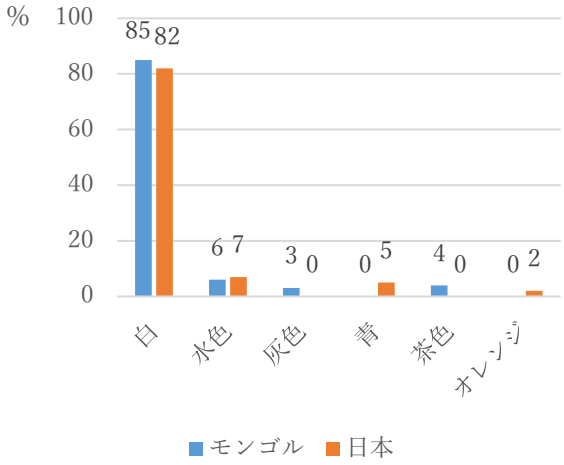


図 13　冬からイメージされる色

(3) 色から対象をイメージする

表 3 は、色からイメージされる対象についてまとめたものである。

日本の児童は青から海をイメージするが、モンゴルの児童とは差異がある。モンゴルの児童は湖をイメージし日本の児童は、青から湖をイメージしてはいない。モンゴルの児童の思い浮かべる青には、モンゴルの広大な湖の青が強く印象付けられているといえる。黄については、両国とも太陽と月を挙げる児童がほとんどであり、その数については図 7 と図 8 で示した結果と同様である。表に挙げてはいないが、両国とも多かったものとして、バナナ、パイナップルといった食べものがあった。緑については草、森林、草原に特徴がみられる。モンゴルでは草が圧倒的に多いが、草原は 0 人である。また森林をイメージした児童も 0 人である。日本の自然環境との違いが顕著に表れているといえる。草原をイメージしたモンゴルの児童がいなかったという点については草原をどのような概念で捉えているか興味深い点である。

表 3　色からイメージされる対象

色	青			黄			緑						白			
%	**海**	空	湖	**太陽**	**月**	星	**葉っぱ**	**草**	木	**森林**	草原	山	雪	氷	雲	紙
モンゴル	**11**	50	17	**73**	**0**	3	**28**	**86**	25	**0**	0	27	51	3	26	19
日本	**62**	44	0	**2**	**30**	9	**44**	**12**	14	**12**	5	26	40	0	23	14

表 3 に示した色以外に、赤、黒についても調査しているが、両国とも大きな差異はみられなかった。赤については、リンゴが多く、次いでイチゴであった。黄からモンゴルの児童が太陽と回答したように、赤について日本の児童が太陽と回答することを想定していたが、太陽と答えたものは少なく、食べものや身近にある日用品が挙げられた。黒については、夜、闇が多く、日用品の鉛筆やペンといったものもあった。中には、恐怖といった心理状態を記載した児童もいた。

2024 年の調査においては、青をイメージする児童がほとんどであった海と空の色に対してどのような青をイメージしたかについても調査した。15 色の青色のカードを提示し、その中から最もイメージに近い一色を選択させた。海の色として、緑みの強い青も提示した。本調査で使用した色カードは、印刷時などに色見本として活用されている DIC カラーガイド（DIC 株式会社制作のカラーガイド）を使用した。DIC カラーガイドを使用した理由は色数が多いため多様な青が提示できること、小さな色カード（切り取り線があり切り取って使用する）であるので複

数の色を並列に示した資料が複数枚作成できることである。提示する色については、予め選択した多数の青の中から、海や空としてイメージされる色、カラーガイドを並べたとき、容易に色の違いが識別できる色を選択した。表4は、DIC カラーガイドの色番を示したものである。

表4　提示資料使用のカラーガイド

番号	カラー番号（色番）	番号	カラー番号（色番）
1	DIC-N890（第9版）	9	DIC-139（第21版）
2	DIC-182（第21版）	10	DIC-178（第21版）
3	DIC-140（第21版）	11	DIC-96（第21版）
4	DIC-2184（第5版）	12	DIC-176（第21版）
5	DIC-21（第21版）	13	DIC-94（第21版）
6	DIC-N870（第9版）	14	DIC-41（第21版）
7	DIC-2174（第5版）	15	DIC-16（第21版）
8	DIC-2175（第5版）		

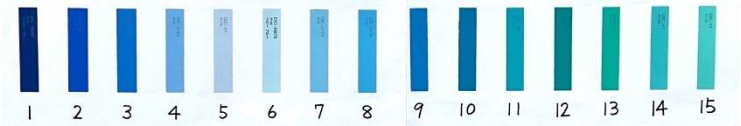


図14は空をイメージする青の結果である。日本の児童が8番を多く選択している点において、モンゴルと差は出ているが、両国とも4番を選択する児童は多い。4番は8番と比較しより濃い青に近い。モンゴルの児童は、3番の色、濃い青も選択している。またグラフの山なりを見ると、8番は日本が突出して高いが、4番と8番を頂点とする 2 つの山が両国とも同じようにあることから、空の青としてイメージする色には似通った傾向があるといえる。有川（2010）は児童画における青空について国別に比較している。児童画であるので絵の具での色の表現となるが、日本と比較的緯度が近いと色彩傾向も似ているとしている。

図3の結果からは、モンゴルの児童の多くは「空の色は青」と回答しており日本の児童より青みの強い色をイメージしている。図 3 ではモンゴルの 23%の児童が水色と回答しているが、水色を選択していても両国の水色には青の濃さに違いがあるといえる。

15色のうち、2番から9番までの青を空の色として選択していることから、児童は経験の中で、様々な青の空を見ていると思われるが、児童がイメージする空は、5番や6番のように白みの強い青や群青のような青ではない。

図15は海をイメージする青の結果である。両国とも似たような山なりをしているといえる。両国とも2番の青を選択しており、次いで9番の選択が多い。2番、9番とも濃い青である。空で選択した青は、やや白みがかった青であったが海は濃い青である。モンゴルの児童は「どこの海をイメージしたか」という問いに対して、「フブスグル湖」との回答が多々あった。この湖はモンゴル北西部ロシア国境にあるモンゴル最大の貯水量を誇る淡水湖である。湖水は透明度が高く、多彩な青を示す美しい湖であり、人気の観光地の一つである。また、「どのようにして海を知ったか」との問いについては、本、インターネットが多く、次いで旅行との回答であった。

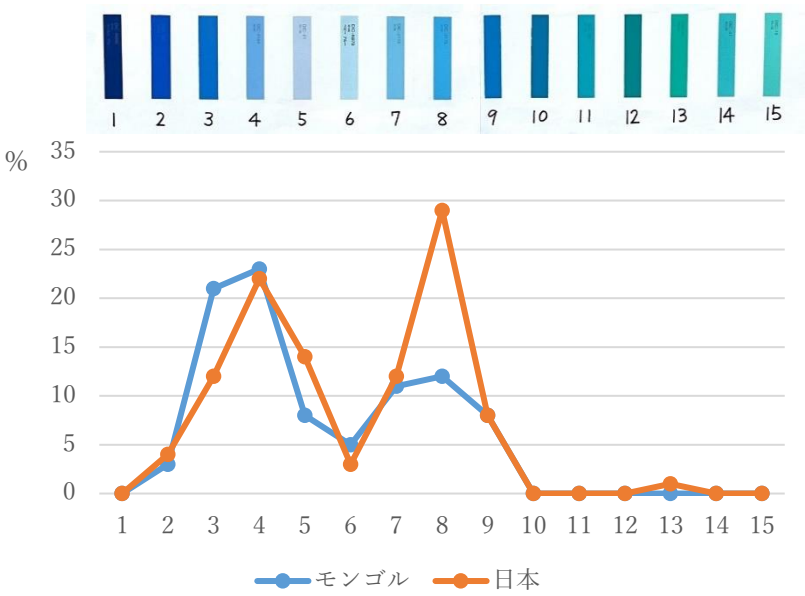


図 14　空をイメージする青

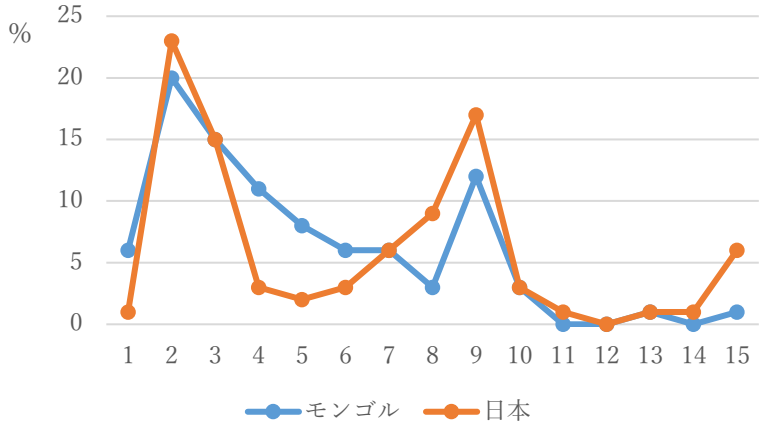
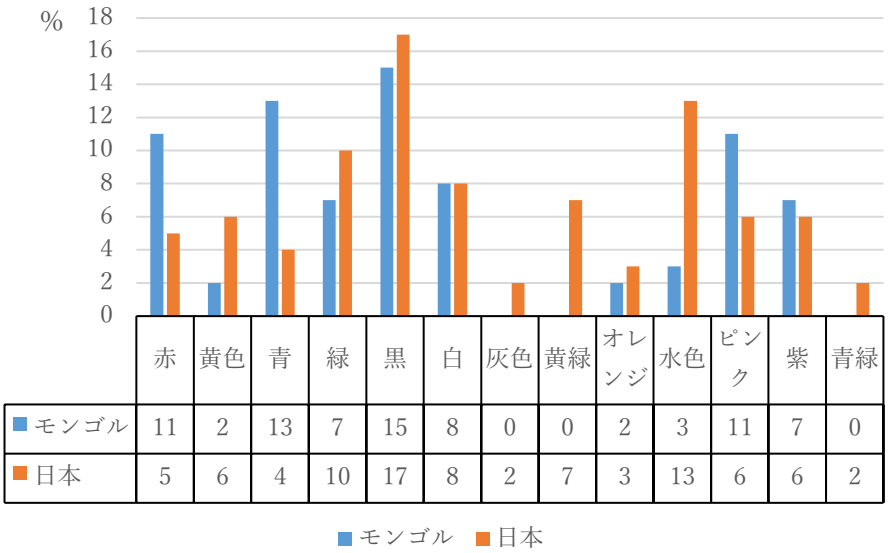


図 15　海をイメージする青

（4）嗜好する色（図 16）

図 16 は、「一番好きな色は何か」との問いに対する回答を、まとめて示したものである。両国とも黒が多いことがわかる。好きな理由についてはいずれも「かっこいい」が多く、他には「応援しているスポーツチームのユニフォームカラー」、「落ち着く」、「好きな昆虫の色」などがあった。日本では、小学生白書（2018）によると水色は特に女子に人気のある色であり、文房具やランドセルなどにも多く使用されている。本調査ではその理由として「かわいい」、「さわやか」、「清潔感」と答えている。世界的に見ても青系の色は爽快さなどを表し、好まれる傾向にある。両国ともピンク、白も多く、理由は水色と同様に「かわいい」が多く、次いで「やさしい」、「やわらかい」と答えていた。モンゴルは赤も多い。国旗の色にも使われており、児童には親しみのある色である。色に関する授業をウランバートル市内小学校で実施した際に、モンゴル国旗をイメージする児童が複数おり、国旗は彼らのアイデンティティの象徴として教えられ、それぞれの色の示す意味を正しく理解している。嗜好する色には地域差があるといわれているが年齢や性別、経験値などによる個人差がある。両国に違いはあるものの、顕著な差異が認められるといい切れるほどの違いがあるとはいえない。ネット社会である現在において、海外の価値観も共有され、自国と他国の文化をともに楽しむ人々も多い。国の違いが嗜好に大きく影響を与えているというよりは、個人の経験やイメージが嗜好する色を決定づけていると考えている。



	赤	黄色	青	緑	黒	白	灰色	黄緑	オレンジ	水色	ピンク	紫	青緑
モンゴル	11	2	13	7	15	8	0	0	2	3	11	7	0
日本	5	6	4	10	17	8	2	7	3	13	6	6	2

図 16　嗜好色

3.4. 調査を終えて

対象からイメージされる色は国によって異なることは知られているが、本調査におけるモンゴルと日本の児童についても同様に対象によっては国による差異が認められた。国によってイメージされる色が異なる理由としてその国の自然、植生、気象、文化などがあり、それに加えて個人の経験によっても決定づけられるといえる。今回の調査では色からイメージされることと、具体的な対象からイメージされる色は必ずしも一致するものではなく、色からイメージする方が、その幅は広く、個人の体験や生活環境が影響しているのではないかと考えている。それに比べ具体的な対象からは色をイメージしやすいがその色は、赤、黄、青の三原色をはじめ、限定的な傾向にあるといえる。色は多様にあることは知っていてもその色名を知らなかったり、言葉による表し方がわからなかったりした可能性もある。

色に対する固定概念がすでにあることも否定できない。イメージされる色が国によって特徴づけられるということは、その色は固定概念として植え付けられ、対象に対する色を迷うことなく選択してしまうことになる。日本で例えるなら、考えを巡らせることなく太陽を描くときは赤を使い、月を描くときは黄を使えば、太陽らしく、または月らしく見えるように描けてしまうということである。この概念化された色は、文化的背景も大きく関わっているとされる。児童はその国の文化の中で生活をし、対象に対するその文化独自のイメージを植え付けられていく。美術教育には、造形表現を通して多様な見方・考え方を育てるという目的がある。すでにもっている固定概念から児童をいかに開放し、創造力を発揮させながら見方・考え方を広げ、深めることができできるように指導することが大切である。すでにもち得ているこれらの概念を否定的に捉えるのではなく、イメージを大切にしながらも、固定概念があることを前提にし、表現したいことに応じた色を、児童自らが選択し、表現に生かすことができるよう指導すべきである。色彩感覚をもとにすることで、より個に応じた指導ができる。指導する児童全体がもっている色彩感覚に加え、個人がすでにもち得ている感覚をもとにした指導は、児童の思いに寄り添い、色彩への新たな認識の広がりと表現力育成へとつながる。

造形活動において、幼児期からクレヨンや色鉛筆を使い、その中から自分の好きな色や使いたい色を選んでいる。成長するにつれ、実際とは異なる色を意図的に選ぶことができるようになる。色彩表現には、表現者の心情も関わっているといえるからである。「楽しい雰囲気を表したいので、オレンジにする」「恐ろしい様子を伝えたいので、黒くした」など表したい情景を色で表現しようとする。また、喜怒哀楽といった感情そのものを色で表現できるようになる。成長とともに、表される色にも意味が生まれ、写実的な表現から抽象的な表現まで色を意図的に使うことができるようにもなる。生活環境を背景に子どもの発達と色彩感覚の育ちを関連づけながら実態を見

ていくことで、色彩感覚と具体的な指導を結びつけることができると考えている。

4. まとめ

モンゴルと日本の児童を対象としたアンケート調査により、両国の色彩感覚における共通点や相違点を確認することができた。太陽や月、春や秋からイメージする色には顕著な違いが見られた。色からイメージする対象についても、例えば、青からは、モンゴルは空を、日本は海をイメージし、緑に対しては、植物という共通点はあるものの、モンゴルは草を、日本は葉や森林をイメージしていた。国土や季節の様子、文化などに違いのある両国の比較において、色彩感覚には差異があることがわかった。しかし、冬から白をイメージしたり、黒や白といった無彩色を好んだりするなど共通する点もあった。これらの共通点は似通った体験を通して培われた認識や感覚であるといえるであろう。インターネットの普及に伴い、世界中のあらゆるものを視聴することができる。このことは、どこにいても同様のものを見聞きすることが可能となり、共通の認識や感覚をもつことにつながる。国土の自然環境だけでなく、ネット社会下における児童の生活や興味関心を踏まえた検証が必要である。

色彩は暮らしの中に常に存在し、私たちはそれを無意識的にまたは意識的に使いながら生活を営んでいる。個々の色の嗜好によって、色を選び、自分の生活に彩を添える。また衣服などを通して発信された色は流行となり、また人々の多くが手にする色が流行を生むなど、個々の嗜好にも影響を与えている。しかし、色は個人的な嗜好にとどまらず、様々な役割をも果たしている。色によって危険を察知したり、安全安心を得たりする。色によって集団をまとめたり、鼓舞したりもできる。色はその与えられ方によって、その色に対する感じ方や心のもち様も変えることができるといえる。日本人は古来より多彩な色を染め上げ、布を織り、生活の中で色を楽しむ文化を継承してきた国である。モンゴルも同様であり、その長い歴史の中で、他国の影響を受けながらも独自の色彩文化を築いてきた。色はもともと王族や貴族と呼ばれた特権階級の人々だけのものであった。しかし、現在はそうではない。誰でも自分の衣服や持ちものなど、自分の好みの色を選び、手にすることができる。誰もが色と関わりながら暮らしている。このような時代において色を学ぶことは、更に生活を豊かにする材料の一つになり得ると考える。現段階の本論文に係る研究では、色彩感覚の論理的な根拠付けはできてはいない。今後は、調査を通してより確かな実態を把握し、色彩感覚における国の特性を明らかにするとともに、イメージを誘発する要因について、児童を取り巻く生活環境、教育、文化的視点から多角的に分析していく。感情に対する色のイメージについても調査し、両国の色彩感覚をより深く理解することで、我が国を特徴付ける色彩感覚を明らかにしたい。そしてその結果をもとに、美術教育における効果的な色彩指導の在り方や具体的指導法を提案したいと考えている。

本研究は JSPS 科研費　課題番号：JP22K00699 の助成を受けたものです。

引用文献

文部科学省 (2018).『小学校学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説図画工作編』日本文教出版.
モンゴル教育文化科学スポーツ省 (2019).「芸術」『初等教育カリキュラム』(БАГА БОЛОВСРОЛЫН СУРГАЛТЫН ХӨТӨЛБӨР), 64-70.
独立行政法人大学改革支援・学位授与機構 (2021).『高等教育・質保証システムの概要　モンゴル』, 4-16.
文部科学省 「令和 4 年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査調査結果」 (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1415063_00001.htm) (2023 年 12 月 1 日)
大山正・齋藤美穂 (2009).『色彩学入門　色と感性の心理』東京大学出版会.
千々岩英彰 (2001).『色彩学概説』東京大学出版会.
西 林 (2000).「研究ノート　モンゴル族の伝統的な色彩概念」『明星大学社会学研究紀要』20, 89-92.
J アイアン (2020).『装飾文様』（Ж.ТӨМӨРБА『*ХЭЭ УГАЛЗ*』）,УЛААНБААТАР ПРИНТ XXX, 18-28.
城一夫 (2017).『日本の色のルーツを探して』株式会社アイワード, 12-50
塚田敢 (1978).『色彩の美学』紀伊國屋書店,44-76, 150-153.

有川雅裕 (2010).「日本と世界の児童画における色彩傾向の分析－青空の色についての比較－」『青山学院大学教育人間科学部紀要』1, 3-27.
室 靖 (1982).『実践造形教育体系 11 世界の児童画』開隆堂, 143-147.
梅澤啓一 (2003).『感性と造形表現－その発達のメカニズム－』晃洋書房.
妻藤純子 (2022).「小学校美術教育におけるモンゴル国と日本の技能指導」『国際教育研究所紀要』33, 45-57.
国立開発研究法人 国立環境研究所 (2021).『環境儀』83, (https://www.nies.go.jp/kanko/kankyogi/83/04) (2023 年 12 月 1 日)
小学生白書 Web 版学研教育総合研究所 (https:/www.gakken.jp/kyouikusouken/whitepaper/201809) (2024 年 12 月 25 日)
小沢重男 (1994).『現在モンゴル語辞典』大学書林.

Comparison of Children's Sense of Color in Mongolia and Japan

Junko Saito
(Okayama University of Science)

In art education, understanding children's sense of color will lead to effective color instruction. It can be said that color sense is developed over a long period of time while being influenced by the natural environment in which people live.

Therefore, I thought it would be possible to understand the characteristics of the Japanese sense of color more clearly by comparing it with that of Mongolia, a country with a very different natural environment from Japan.

In this study, I conducted a survey with the aim of clarifying the actual conditions of color sense of Mongolian and Japanese children, respectively. The survey method was a questionnaire (descriptive form) administered to children in both countries on the colors they imagine from familiar objects (familiar nature and seasons such as the sky, mountains, and the sea), the objects they imagine from colors, and the children's preferences for colors. As a result, some of the responses from the two countries were not significantly different. However, there were marked differences in items related to the sea and sky, the sun and moon, and the seasons, confirming that there are differences in color sense.

Keywords: Art education, Sense of color, Mongolia, Comparative study